工学研究科の“これまで”と“これから”

巻頭言

田　中　敏　宏*

"Up to now" and "From now on" of Graduate School of Engineering

Key Words：Future Design, Open Innovation, Human Resource Development

大阪大学工学研究科は1896年に官立大阪工業学校が中之島に開設されてから数えると、今年2016年に120周年を迎えます。干支で言うと“丙の申（さる）”年にあたり、還暦を2回繰り返したことになります。その後、大阪工業大学、大阪帝国大学工学部を経て、戦後、大阪大学工学部になりました。1回目の還暦を迎えたのは1956年で、「もはや戦後ではない」という時代になり、日本の高度経済成長期に突入して世の中の工業化が進み、多くのエンジニアが本学工学部を巣立ち、社会で大いに活躍されて今日に至っています。今年は2回目の還暦を迎え、次の60年を見据えてさらなる発展を遂げるために、今何をすべきかを考える年と位置付けています。官立大阪工業学校が設立された年を起点とし、合計180年先を見通したとしたら、その途上の120年が過ぎたという位置づけです。120年間にわたり発展し続けたのは、多くの先輩の方々が学内はもとより、大阪大学の外の世界で大いに活躍され、そのご活躍の評価の上に現在の工学研究科・工学部が成り立っています。

上述の180年という時間の長さですが、最近、同様の長さを話題にしているあるコンセプトが提唱されています。それは、大阪大学の環境イノベーションデザインセンターに所属する先生方が提唱された「フューチャーデザイン」（フューチャー・デザイン、西條辰義著、勁草書房）という考え方です。これは、7世代先の未来の「将来世代」を仮定し、その世代から振り返って「今」を考え、7世代先にも持続的社会が発展維持をするためには、「今」何をすべきかを考えるというコンセプトです。この7世代は、例えば、25，6歳で次の世代が生まれると考えるとほぼ180年になります。言い換えると、1896年に日本の工業化に資するための学校を立ち上げられた方々が180年後の世界を夢見られたとすると、我々の使命は、その180年後（今から60年後）の世代を一つの目標として、持続的社会を維持発展するために工学という分野は今何をすべきかを考えるということになります。

上述の環境イノベーションデザインセンターは特別経費で運営されてきたプロジェクトが立ち上げたセンターですが、2016年3月に終了しました。上記の考え方を持続発展するために、工学研究科にてこれまで運営してきた他の2つの高度人材育成センターとフロンティア研究センターを統合し、さらに環境イノベーションデザインセンターのミッションを組み入れて、「オープンイノベーション教育研究センター」を工学研究科付属センターとして2016年4月1日に立ち上げました。同センターは大阪大学に蓄積される多様な研究シーズや教育プログラムを基盤としつつ、オープンイノベーションの推進の拠点として、特徴的な教育研究活動を広く展開していく予定です。長期的な視点に立った人材育成こそが大学の使命であると考え、上述のフューチャーデザインの長期的な構想に立った上で、数年～10年単位の教育・研究プロジェクト等を考えていきたいと思っています。上記センターのブランチとしてグランフロント大阪のナレッジキャピタルにも「オープンイノベーションオフィス」を設け、学外の諸機関とも連携を取りやすい運営を目指しています。オープンイノベーションを基本コンセプトとして皆様方とのオープンな情報交換を真髄としていますので、色々なご意見を頂戴できればと思っております。

* Toshihiro TANAKA
1957年4月生
大阪大学　大学院工学研究科　博士後期課程（1985年）
現在、大阪大学　大学院工学研究科
教授　工学研究科長　工学部長
工学博士　　材料物理化学
TEL：06-6879-7504
FAX：06-6879-7504
E-mail：tanaka@mat.eng.osaka-u.ac.jp